湯源郷を結ぶ

- 現代的湯治空間の再編 -



Keywords

湯治 二地域居住 地方衰退 温泉街 癒し 観光経済

AK14001 赤司 康太

1. 研究背景

学生時代に課外活動で幾つかの地域に入り込むことがあったが、衰退の一途をたどる地域は少子高齢化や過疎化問題の打開策として観光を推進していた。観光が本当に地方を救うのか疑問に残った。

地方衰退の話は多くの場で話題に上がるようになった。 政府は平成15年に国策として「観光立国」を打ち出した。 これは、少子高齢化社会の到来に向けた、地方活性化の 切り札として位置付けられている。また平成20年には国 土交通省の外局として観光庁が設置された。これに伴い、 地方活性化の一つとして「観光」が大きく取り上げられ るようになり、各地域で観光を主軸とした経済の循環を 目指すところが多くなった。

しかしながら、格安航空会社の就航やインフラの整備などによって、地方へのアクセスが容易になったことで地方間の競争は一層激しくなっているのではないか。力のない地域は観光経済推奨の潮流にのまれ、淘汰されていってしまうのではないかという懸念がある。

2. 対象敷地

2.1 概要

対象敷地は静岡県東伊豆町熱川地区である。東伊豆町は、伊豆半島東海岸の中央に位置し、北西に天城連山に囲まれ地形は主として丘陵をなし、海に面して幾つかの平地が点在している。東伊豆町は6つの温泉郷を有しており、熱川地区もその一つである。鉄道(伊豆急行)が1本東伊豆町全体に走っており、海岸沿いに国道135号が走っている。都心からの交通は鉄道で約2時間、車で3時間程度の距離にあり、遠からず近からずという距離にある。東伊豆町の人口は約12,500人(うち熱川地区は約230人)、世帯数は約5,600世帯(うち熱川地区は約130世帯)である。高齢化率は、40%を超えている。

2.2 変遷

研究指導:清水 郁郎 教授

東伊豆町は元々、農漁業を生業にしていたが、昭和35年に町民たち自らの考えで観光経済へと転換している [fig.1]。当時は大手の資本などが介入していなかったが、バブル期や団体旅行ブームなどの時期に大型の複合型旅

館が海岸沿いに乱立し、企業の保養地として大きく栄えた。しかし、バブルがはじけ団体旅行ブームから個人旅行の時代となった今日においては、宿泊客数は減少の一途をたどっている。



fig.1 産業構造の変化

3.3 温泉地としての熱川

温泉浴の始まりの記述は、「風土記」や「日本書紀」に見られる。中世には武士などが戦傷を治すために温泉を使ったと言う話が出てくる。江戸時代、徳川の全国統一で内戦が無くなると「旅」が盛んになった。しかし、庶民の旅には多くの規制があり、旅には必ずタテマエは「社等であった。庶民が拠り所としたタテマエは「社等であった。庶民が拠り所としたタテマエは「社降には「湯に入る旅」として温泉湯治が庶民にも広まり、場治は日常の苦しい労働や厳しい規制から逃れ楽しい日々を過ごすことができる機会であった。また異郷の人との出会いもあり、異文化や知らない生活を聞いて驚き、「湯に入ること」と同時に「そこでの付き合いを楽しむこと」に人気があった。温泉地ではこうして日本の宿泊観光対象地としての利用が増えていき、日本の観光の一つの基本の型となる。

しかしながら、現代において温泉地としての役割は失われつつあるのではないか。観光の主たる目的地としては人気はあるものの、「湯による治療」や「そこでの付き合いを楽しむ」ことからはかけ離れ、宴会前に一風呂

浴びるといったことが示すように、温泉はおまけのよう な意味合いが強くなっているのではないだろうか。

2.4 大型旅館

東伊豆町全体に言えることではあるが、熱川地区は海岸沿いに大型の旅館群が乱立し、観光客の行動(食事・温泉・宿泊・娯楽)をその建物内で完結させてしまい、閉じている[fig.2]。 東伊豆に6つある各温泉郷は山々で分断され、どこも小規模に温泉街を形成しているにもかかわらず、閉鎖的な環境が生まれている。結果として、温泉街としての活気は失われ、衰退するようになった[fig.3,4]。観光経済で循環していたこの地域では、観光中心街の衰退と共に住民の生活基盤も失われつつある。そこに少子高齢化や過疎化の問題も押し寄せ、地域社会の持続が困難な状況にある。



fig.2 海岸沿いに建つ大型旅館



fig.3,4 シャッター化する店舗

3. 研究目的

観光地として存続できる力が乏しく、衰退の一途をた どる熱川が、持続できるような計画をする。

また温泉地としてのポテンシャルを生かし、都市と地 方の今日的な関わり方を提案する。

4. 設計趣旨とプログラム

閉鎖的な大型旅館に依存した観光経済として存続させるのではなく、熱川が本来持つ温泉という貴重な自然資源を生かし、マチに開いた現代的湯治場を創出し、人々の循環を生み出すことでマチの持続を図る[fig.5]。また湯治の本来の意味に立ち返り、癒しの場所を伴う滞在場

所として、都心の人々にとっても新たな居住環境の提案 を行う。

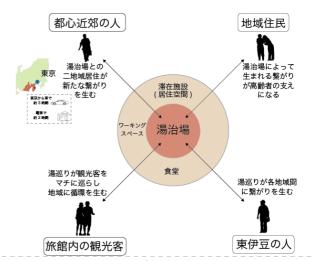


fig.5 ダイアグラム

湯治場を核として、都心との二地域居住や短期・中期 滞在を可能にする滞在施設を設ける[fig.6]。

- 湯治場
- 癒しの空間として人々の集まる場となる。
- 二地域居住施設
- 都心とは異なるコミュニティが生まれるような湯治場に付随した滞在施設を設ける。
- · 食堂、物産店
- 東伊豆に点在する市場や物産店などで食材を買い、ここで自炊をする。住民、湯治滞在者、観光客の交流の場とする。



fig.6 配置計画

5. 展望

衰退していく観光経済に依存した熱川に、現代的な湯 治場を計画することで、再び人の賑わいの声が聞こえて くることを願う。

参考文献

- 1) 東伊豆町HP http://www.town.higashiizu.shizuoka.jp
- 2) 健康増進のための楽養湯空間 建築資料研究社

